

CPC 課題レポート

2023 年 7 月 5 日（水） 第 1399 回 CPC

92 番 岡野雄士

課題

1. 剖検が必要と考えられた根拠となった、臨床的な問題点を箇条書きで記しなさい。

- 腫瘍の広がり
- 胆管拡張、閉塞の原因
- 腫瘍の組織学的評価
 - － Adenocarcinoma として良いのか
 - － NEC・IPMC などの可能性

2. 病理解剖で認められた主要な所見を、箇条書きで記しなさい。

- 浸潤性胆管癌（全経過 4 ヶ月・化学療法後の状態）
 - － 原発巣：臍鉤部（4.0 × 4.0 cm）
 - * 壊死・出血を伴いつつ臍外組織まで浸潤。組織学的には中分化型主体で、低分化成分も見られる。
 - * 全体の 70%程度が壊死・変性を来している
 - * 腫瘍辺縁を中心に viable な成分の増殖を認める
 - * 胆管浸潤は認めない
 - － 浸潤・転移
 - * 十二指腸
 - ・ 多数の脈間浸潤・神経周囲浸潤を伴って十二指腸の粘膜上皮直下まで直接浸潤
 - ・ 脈間内腔への露出なし
 - * 肝臓（2836 g）
 - ・ 両側全域に大小の壊死を伴う転移巣（最大：右葉、径約 13.7 cm）
 - ・ 肝全体の 60%程度を転移巣が占めた
 - ・ 肝門部付近大型胆管では腫瘍浸潤に伴って高度の狭窄を来たしており、その上流では胆管拡張を認めた
 - ・ 肝門部の大型門脈内には器質化血栓・腫瘍栓を認めた
 - * 肺（284 g; 341 g）
 - ・ 両肺全域・散在性（最大径 0.5 cm）
 - * 脾臓（138 g）

- ・ 最大径 0.1 cm
 - * 骨髓
 - ・ 第 7 胸椎（径 0.8 cm）
 - * 右副腎（9 g）
 - ・ 脈管侵襲（+）（径 2.5 cm）
 - * リンパ節
 - ・ 腭頭部周囲・大動脈周囲・気管周囲
- － 関連病変
 - * 黄疸
 - ・ 肉眼的に皮膚黄染・黄疸腎を認めた
 - ・ 残存する肝実質は肉眼的に緑色調・組織学的には多数の胆汁栓が見られる
 - * 腔水症（胸水：50 mL；70 mL・腹水：1500 mL）
- 播種性血管内凝固症候群
 - － 血栓塞栓症
 - * 左精巣周囲：微小血栓・1 箇所
 - * 肺：両側・微小血栓・数箇所
 - * 右腎：血栓に随伴した腎梗塞（1.5 cm 大）を伴う
 - － 非細菌性血栓性心内膜症
 - * 大動脈弁に 0.8 cm 大の疣贅形成
- 左心室求心性肥大（304 g）
- 諸臓器鬱血
 - － 肝臓：2836 g
 - － 脾臓：138 g
 - － 肺：284 g；341 g
- 前立腺結節性過形成（左：6 mm）
- 大動脈粥状硬化症

3. 臨床的な問題点が病理解剖によりどのように解決したか、文章で説明しなさい。

腭頭部に中分化～低分化型の浸潤性膵管癌を認め、十二指腸への直腸浸潤を認めたほか、肝臓・肺・脾臓・骨髓にも転移を認めた。また、膵臓に嚢胞性病変は明らかではなかった。しかし、腫瘍の増大に伴って不明瞭化した可能性は否定できない。膵臓の原発部、肝転移巣では壊死・変性が目立ち、初期の化学療法は奏功していた可能性が考えられる。閉塞性黄疸・胆管炎に関しては、肝転移巣からの肝内大型胆管への腫瘍浸潤および多数の顕微鏡的肝転移が寄与していたと考えられる。

4. 本症例が死に至った病態について、自分が理解した内容を文章で説明しなさい。

肝臓の 60%程度が転移巣に占められており、残存する肝実質にも高度の胆汁鬱滞を認めたことから、最終的には肝不全が主たる死因になったと考えられる。